

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
63	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Effects of dietary, drinking, and smoking habits on the prognosis of gastric cancer. 食事、飲酒および喫煙習慣が胃癌の予後に及ぼす影響	
執筆者	
Huang XE, Tajima K, Hamajima N, Kodera Y, Yamamura Y, Xiang J, Tominaga S, Tokudome S.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Nutr Cancer. 2000;38(1):30-6.	
キーワード	
食習慣、飲酒習慣、喫煙習慣、胃癌、予後	
要 旨	
<p>食習慣、飲酒習慣、喫煙習慣が胃癌の発生に関係があるということは明らかにされているが、胃癌の予後に対する影響についてはほとんど知られていない。この点について調べるために、愛知県がんセンターのデータを用いて予後分析を行った。1988年1月から1994年12月にかけて、877人の胃癌患者（男性：578人、女性：299人）の喫煙習慣、飲酒習慣や食物摂取状況、組織学的グレードや腫瘍の臨床学的ステージ、そして予後追跡の結果が集められた。すべての患者の生存状況は1998年12月まで追跡され、累積生存率はカプラン・マイヤー法で推定された。それぞれの生活習慣が胃癌による死亡に与える影響は比例ハザードモデルにより計算された。年齢、性、組織学的グレードや病気のステージを調整したハザード比も求められた。生野菜を摂取している場合のハザード比は0.74（95%信頼区間：0.56-0.98）、1週間に3回以上豆腐を摂取している場合のハザード比は0.65（95%CI：0.42-0.99）、鶏肉を摂取している場合のハザード比は0.61（95%CI：0.39-0.95）で、いずれも有意に危険性を減らすことが明らかになった。しかしながら喫煙習慣のある者ではリスク比が2.53（95%信頼区間：1.22-5.29）で、喫煙と胃癌患者の生存との間には逆の量反応関係が認められた。また、飲酒習慣がある者では飲酒習慣のない者と比べハザード比が高かったが（ハザード比：1.36（95%信頼区間：0.91-2.02）、統計学的に有意ではなかった。以上より、本研究において豆腐や生野菜の摂取は好ましいが、喫煙習慣は胃癌の予後にとって良くない因子であることが明らかとなった。</p>	